

センターをめぐる状況と紀要の役割

高 木 靖 文*

教育学部附属「中等教育研究センター」『研究紀要』の第2号が無事発行の運びとなった。編集に携わったものの一人として、日頃の研究の成果をお寄せいただいた諸賢に先ずもって満腔の謝意を表したい。

さて、当センターも、平成11年4月に発足して3年が過ぎようとしているが、大学・学部をめぐる急速な情勢の変化の中で、早くも重大な岐路に立たされることになった。とりわけ独立行政法人化に向けての附属学校の位置づけや役割の再検討は、当然、学部・大学院教育発達研究科との連携と協力関係を前提に「中等教育に関する理論及びその応用の研究を行う」（「センター規定」）当センターの有りようにも大きな影を投げかけている。

発足時におけるセンターの任務は、学部・大学院に止まらず、学内の研究者が附属学校と共同して行う教育研究の連絡・調整のほか、自ら共同研究を組織・遂行し、成果を広く教育現場に返して、教育学の研究に裨益することであった。特定の講座や篤志な教官との関係で遂行されてきた、附属との伝統的な「共同研究」体制を改め、学部全体の関与を前提にした体制を志向したからである。それゆえ学部・大学院は、講座毎の当面する研究テーマを掲げ、附属教官を加えて真摯な取り組みを開始する事になった。かくして、「中等教育の理念方法及び経営」「中等カリキュラムの開発」「教育の国際化」「青少年の発達と教育」「心の教育と支援」などがキー概念となり、センターは文字通り仲立ちとなった。

もちろん、これまで附属校と共同して行われた各種プロジェクトの成果が、新たな取り組みのベースになったことはいうまでもない。総合的学習のカリキュラム開発、教員研修留学生の教育体験、中高一貫教育の検討、先進的情報教育の実践など、日本の「新しい学校」教育体制への研究開発の積み重ねは、他部局および他大学研究者からも一定の評価を受けており、その発展を目指す当センターへの期待は決して小さくなかったと言ってよい。

現代の少子高齢化社会・高度情報化社会・消費社会の混迷の中で青年前期の教育の有るべき姿を根元的に検討することは、われわれ教育および教育学研究に関わるものにとっての共通の関心事である。それには初等教育との連続や高等教育への展開、大学生の質の問題や青年後期以後の発達の問題、世界的な中等教育の問題状況の比較検討など、山積するさし迫った課題に取り組みなければならない。その中で提起されている「教育発達科学研究科附属中等教育研究開発センター」構想は、共同研究のコーディネイトに止まらず、研究情報やデータのやりとりを含む、国内外の中等教育研究のネットワーク化を視野に入れた総合的・実践的研究機構の構築を目指す時宜を得たものであり、

* 教育発達科学研究科教授・学校環境学

大学の研究・教育機関の新しい姿を彷彿させる。実践・実験校としての附属学校と学部・教育発達科学研究科との距離が不確かになりつつある中であればこそ、センターの比重は一層大きくなるであろうし、学部・研究科教官、附属教官、学内の関係教官をはじめ中等教育に関して実践的関心をもつ多くの研究者によって、一層強固に支えられることを望むものである。

しかし、そのためには、研究の着実な積み重ねが何よりも必要である。耳目を集める派手な発言や、すぐに覆る「有益な理論」、厚さだけの空疎な研究は要らない。センターは、現代の教育課題を見据え、強固な基礎の上に誤りのない実践の方途を探り当てる、地道ではあるがたしかな研究者の息づく場にすべきであろう。

今回は、馬越徹教授から「中等教育改革の諸課題」と題して特別に講演をたまわった（2001. 11. 30）ので、中等教育の在り方についての調査研究とならんで内容を掲載させていただくことにした。附属生徒の生活や意識のありようについての実証的研究、新聞などで採り上げられ注目を集めている「個別学習アシスト教室」など、新たな試みへの分析研究もあり、まずはセンターの目的に添った『紀要』になったと思う。

最後に、尊敬する平井孝先生（行政法）の第二詩集『鳥の言い分』（花神社、1988年刊）にある章句の引用をお許し頂いて、筆を擱く。現代の（とくに若い）研究者への木鐸として、味わい深い戒めを含んだ好きな響きがあるからである。

「明治が消えてゆくように／いずれ松林は滅びてゆく／そのかわりか／知識だけは殖えている／うすっぺらの新聞でも一月たつと／ごみのポリ袋では間に合わぬ／そうだ たしかに知識は山積みになって／いつか鳥たちの空を突き抜けている／それでも 人間は／まだ まだだと積んでいる／いつも最新のものにしておこうとする／見たまえ そう あの暗いところだ／石のうえに鉄やぐらを組んでいる／そこから八方に鋼の手がのびている／文明の混乱を伝える虚声だ／精神の迷路を走る強震だ／その嗤いは粘りつく蜘蛛の糸だ／そこでは鳥も飛ばぬ（以下略）」（「城跡」）